

すべては住民の安心・安全のために！ 住民良し、企業良し、行政良し！

三方良しの公共事業推進カンファレンス 2016 四国

～10年の軌跡から学び、新たな一歩を踏み出す～

日時：平成28年6月10日（金）13：30～17：39

場所：かがわ国際会議場

主催：三方良しの公共事業推進研究会、（一社）地域建設業新未来研究会

協賛：（一社）四国クリエイティブ協会

後援：国土交通省四国地方整備局、全国建設青年会議、四国建設業協会連合会、（一社）建設コンサルタント協会四国支部、（一社）日本建設業連合会四国支部、日本青年会議所建設部会四国支部

企画協力：（株）日刊建設通信新聞社

プログラム：



第一部 基調講演「三方良しの公共事業改革10年に思う」

西日本高速道路取締役常務執行役員 奥平聖

特別講演「担い手の確保に向けた四国地方整備局の取組」

国土交通省四国地方整備局企画部長 畠中英人

第二部 事例発表「新潟県庁よりビデオレター」

～新潟県での三方良しスタートから今日までの取り組みについて～

新潟県土木部道路建設課課長補佐 瀬戸民枝（ビデオレターにて参加）

三方良しの公共事業推進研究会新潟支部長 支部長 小野孝史

事例発表「全てを可視化した三方良し ～建設 ICT のものづくりのあるべき姿」

一二三北路株式会社 建設土木工事部課長 坂下淳一

事例発表「当社で取り組む三方良し」

福島県福島市 寿建設株式会社 代表取締役社長 森崎英五朗

事例発表「高知の片田舎で実践するチーム礪部の三方良しの公共事業、その10年」

高知県奈半利町 有限会社礪部組常務取締役 礪部英俊、工事主任 田中彰司

事例発表「地域住民の安全をいち早く確保するために、難条件の現場でいかに工夫したか」

宮崎県 株式会社内山建設 土木部次長 金丸正明

第三部 トークセッション「三方良しの公共事業改革」

ゴールドドラットコンサルティング日本代表 岸良祐司（きしら ゆうじ）

国土交通省四国地方整備局長 石橋良啓

西日本高速道路取締役常務執行役員 奥平聖（おくだいら きよし）

三方良しの公共事業推進研究会理事 熊谷一男（くまがい かずお）

内容：

13:30～13:32 プロモーションビデオ カンファレンス開催

- ・第10回記念
- ・国民の安心と安全を守る、公共事業の原点回帰へ・・・
- ・三現主義（現場、現物、現実）
- ・今までとは違う視点で取り組む必要がある
- ・2007年東京、札幌、東京、名古屋、仙台、大阪、新潟、広島、福岡、そして高松

13:34～13:45 開会挨拶 三方良しの公共事業推進研究会理事長 砂子邦弘

- ・北の大地から参加した砂子です。
- ・本日のカンファレンスは、「三方良しの公共事業推進研究会」「地域建設業新未来研究会」の主催で開催。
- ・2007年5月8日に第1回目、東京でカンファレンスを開催。本日10回目の節目。

○第1回目のカンファレンスは

- ・1回目のフォーラム、開会宣言「社会に最大の利益をもたらすために」、受・発注者が取り組み、利用者を含む三方が喜び、元気になることを目指す。
- ・事務次官を務め、当時は大臣官房技術審議官の佐藤直良さんによる基調講演「価値観を共有し共にパートナーであり続けるために」。
- ・四国地方整備局石橋良啓整備局長 当時、北海道開発局勤務で、「“現場を待たせない”ワンデーレスポンスの取組」をご紹介いただいた。
- ・NEXCO奥平常務 当時、国土交通省大臣官房審議官で、基調講演「公共事業の三方良し」。

○それから10年

- ・三方良しを推進する現場の知恵
- ・その時代時代のテーマに乗っ取って、2回目札幌では「秘密を」、3回目「答えは現場にある」良きパートナーシップの構築を目指して
- ・東日本大震災の後 国難を乗り越えて 国民の安心、安全を守る三方良し
- ・新潟 使い手、作り手で考える町づくり
- ・昨年は福岡「和（なごみ）」公共事業の原点回帰
- ・この9年の間に、地方に三方良しの支部が設立された。
- ・大きな政権交代もあり、公共事業財源の減少、少子高齢化の顕著さ、大震災、ゲリラ豪雨による各地での災害、人材の確保、育成など、多くの課題が山積している。
- ・自ら、将来に向かって「10年のあしあと」を検証しながら、新たな一歩の議論を行うことに大きな意義と感謝。
- ・国交省では、生産性向上の為、利益確保の為の i-Construction も取り込まれ、課題として取り組んでいきたい。
- ・各地でがんばっている方の事例発表、中心に取り組まれている方々によるトークセッション。
- ・次の一歩につながることを祈念し挨拶にかえる。

13:45～13:52 来賓挨拶 国土交通省四国地方整備局長 石橋良啓

- ・多くの方々の参加のもと開催されること、お喜び申し上げます。
- ・熊本地震では、14日の前震、16日の本震により、多くの尊い命がなくなり、お見舞い申し上げます。
- ・2007年5月8日、東京において三方良し公共事業フォーラム 5月8日を「三方良しの日」北海道開発局で勤務していた私も話させていただきました。
- ・2009、2010年には海外からも参加があり、国際カンファレンス。
- ・三方良しの事業改革宣言がされてから10年、この高松で開催され、「縁」を感じる。
- ・公共事業予算は、平成4年をピークに、非常に厳しい状況。高齢化による労働人口の減少の中、甚大な自然災害への対応はますます重要。
- ・そのような中、国民経済の健全な発展を目的とした品確法などの改訂、担い手3法の改定は、

良いモノをタイムリーに提供し、三方良しの精神につながるものと考え、指針に基づいた取り組みを推進中。

- ・設計労働単価の引き上げ35%アップ、一般管理費が25%アップ、歩切りの廃止、低入札調査基準価格の引き上げ、国債の適正な活用による発注、施工時期の平準化。
- ・昨年度より i-Construction 平準化、ICTの全面的な活用など「生産性元年」として、国土交通省全省をあげて取り組む。推進体制を整え取り組むので、協力を。
- ・祈念すべき10年として「10年の軌跡から学び、新たな一歩を踏み出す」と、より進歩した三方良しを目指すとなっている。
- ・みなさまにとって実りのあるカンファレンスとなりますことを。

13:52~14:53 第一部

13:52~14:36 基調講演「三方良しの公共事業改革10年に思う」

○講師：西日本高速道路取締役常務執行役員 奥平聖

- ・熊本地震、新名神の工事事故、ベントの倒壊 我が社にとってとんでもない年度始め。
- ・九州の道路は本復旧へ向けがんばっている。工事事故については、安全点検のために全ての工事を中断中。

○節目の10年

- ・自分自身、この10年に何をやってきたかをご紹介します。
- ・本日のメニュー「ワンデーレスポンス」「TAS活動」「NEXCO-WEST TOCクラブ」

○「三方良し」カンファレンスの10年の歩み

- ・2007 東京 宣言採択
- ・2008 札幌 ゴールドラット博士参加 「和(わ)」
- ・2009 東京 TOC世界大会と同時開催 ゴールドラット博士参加 スペシャルアワード受賞
- ・2010 名古屋
- ・2012 仙台
- ・2013 大阪、新潟
- ・2014 広島
- ・2015 福岡
- ・2016 高松

<ワンデーレスポンス>

- ・発注者が、受注者からの協議に一日で返事をする。
- ・手待ち、手戻りをゼロにし、受注者の工程管理との相乗効果で工期短縮 → 三方良し

◇なぜワンデーレスポンスか？ アンケートから

- ・協議、相談の回答が遅い
- ・みるべき設計変更は見えてほしい

◇「可及的速やかに」と「1日で」の違いは

- ・何日かかろうとも「可及的速やかに」といえば、「可及的速やかに」となる → なら、1日と期限を設ける

↓

1日で返事が出来なければ、「いつ返事が出来るか」を1日で回答することに

○ワンデーレスポンス普及の経緯

- ・ H17 札幌での偶然の現場実験
 - ・ 札幌開発建設部の監督官がたまたまワンデーレスポンスを実行
 - ・ (株)砂子組がCCPMを独自に勉強
- ↓
- 早くモノが出来れば住民も早く使えてメリット、受注者も利益
- ・ H18 15件の工事でワンデーレスポンスを試行
 - ・ H19 北海道開発局の全工事で適用、国土交通省の全整備局で試行開始
 - ・ H20 国土交通省の全整備局で試行拡大

○改めて質問です

- ・ ワンデーレスポンスの「目的」は何だったのでしょうか？
1日で回答すること？ それは「手段」です
工期短縮することが目的
- ↓
- 現実には、ワンデーレスポンスは行っているが、工期は短縮できていない・・・
- ・ 目的と手段のはきちがい

○目的と手段を明確にするために

何のために？	目的
何を？	成果 目的達成の道具 必要最小か
どうやって？	手段 成果を得る作業 合理的か

○ワンデーレスポンスの本当のねらい

- ・ 工期短縮は、直接的な「目的」
 - ・ 人が減って、「報・連・相」がいまいち、部下とのコミュニケーションが・・・
- ↓
- ・ コラボレーションとコミュニケーションが大事だ
自分で解決できない課題が発生すれば、すぐに相談
一日で返事をするには、報・連・相が必要になる

○ワンデーレスポンスとCCPMが連携すれば

- ・ 安全管理、工程管理、利益確保がうまくいく。

<TAS活動>

○社長メッセージより

発想 **T** h i n k i n g
行動 **A** c t i o n
スピード **S** p e e d

- ・ 中期目標の「自立と成長」を実現するには、①まず考える、②行動する、③スピードが大事

○何を考えるか

- ①チームが考える安全、安心
マーケット

- ・全員参加で、既存の場を活用して、チーム一丸となって課題解決、目標達成
- ・考え、行動し、素早く！

○TASに至るプロセスを振り返ります

- ・不平不満はいっぱい出てくる
- ・あるべき姿はなかなか出てこない

↓

- ネガティブな課題をポジティブな状況に
- ・モグラたたきをするか根本原因を見つけるか
根本原因は「自由に発言できる場」だった！

○結論

- TASミーティング：言いたいことを言う場、前向きに議論する
TASシート：紙に書く
TASレポート：フォローアップ

<NEXCO-WEST TOCクラブ>

- ・ピラミッド型組織をネットワーク型組織に！
- ・与えられた仕事をこなす社員を、自ら考え行動する社員に

○自ら考え行動するとは

- ・あるべき姿を追求する
- ・仕事の本質を考え抜く
- ・

○新規採用研修

- ・TOC基礎
- ・「論理的に考える3つのツール」 先輩社員による講義とグループワーク
- ・ゴールドラット博士の「20の教え」 希望者による自主勉強を放課後に

○TOCの基礎

- ・
- ・全体最適を理解しよう
- ・マルチタスクはダメよ

○教えることが学びに 講師をつとめた若手の声

- ・やらなくていいモノを考え、決めることが身についた。
- ・人そのものではなく仕組みなど他に問題があると思いながら働くことで、・

○まとめ 最近の若者は

- ・よく発言する → 必ずしもよく考えているわけではない
- ・先輩の話はポジティブにきく → 教え甲斐がある

14:36～14:53 特別講演「担い手の確保に向けた四国地方整備局の取組」

○講師：国土交通省四国地方整備局企画部長 畠中英人

○公共事業の現状

- ・ピークが84兆円、最低は40兆円、ようやく昨今は50兆円。
- ・建設業労働者の減少、高齢化、若年労働者が入ってこない。
- ・公共事業の投資額42%の減の方が、建設労働者の減る27%よりきつかったため、労働者不足が見えにくかった。
- ・しかし、社賃本の維持、管理、災害への対応など 建設業者の役割は大きい

○仕事の出し方の工夫 品確法の改正

- ・担い手確保への配慮 担い手確保に取り組めるよう、適正な利潤の確保
- ・歩切りの根絶、適切な設計変更
- ・設計労務単価のアップ、管理費のアップ、歩切りの根絶、低入札価格調査基準価格のアップ、施工時期の平準化、工事関係書類の簡素化
- ・三者会議、ワンデーレスポンス

◇四国独自の取組など

- ・直轄工事の施工実績を持たない企業、技術者の受注機会の拡大 → 県工事实績の評点を活用
- ・工程管理情報共有化
- ・女性技術者や若手技術者の登用工事の導入、拡大 → 現場代理人の経験を管理技術者と同等と評価
- ・完全週休2日化を目指した試行

○i-Construction

- ・ICT技術の全面的な活用、施工時期の平準化
- ・i-Construction 推進本部会議の設置

○最後に

- ・受発注者のコミュニケーションが大事。

14:53～15:05 第二部 事例発表「新潟県庁よりビデオレター」

～新潟県での三方良しスタートから今日までの取り組みについて～

○講師：新潟県土木部道路建設課課長補佐 瀬戸民枝（ビデオレターにて参加）

三方良しの公共事業推進研究会新潟支部長 支部長 小野孝史

14:55～15:00 「新潟県庁よりビデオレター」

○着物で

- ・新潟のイメージは米どころ、お酒、着物の産地。小千谷縮（おぢやちぢみ）

○土木部の予算書

- ・ 予算書 取り組み方針の1ページに「三方良し」の記載がある。
- ・ 平成24年に三方良しの勉強会 岸田先生の講義 → この取り組みは良い、これで何かが変わる!
- ・ 新潟県では全県で説明会を実施することに。4人が交代で県内で説明会。岸田先生の勉強会から11日後にスタート、3ヶ月で17回、職員が延べ400人、建設業の方が延べ120人参加。
- ・ 去年は、高知県磯部組(いそべぐみ)の宮内さんに講演いただき。
- ・ 誰のために、何のために工事をするのか、三方良しのために、みんなで議論が進められることは、とても素晴らしいことです。
- ・ 新潟のお酒がおいしいのには訳があります。是非新潟にきてください。おいしい訳を教えてください。

15:00～15:05 新潟県での三方良し スタートから今日までの取り組みについて 小野孝史

○はじめに

- ・ たった3年前に始まった取り組み。それまでは、県と建設業者は冷えた夫婦、仮面夫婦でしたが、今は夫婦円満です。
- ・ 受注者・発注者が一緒に学ぶ機会が出来た。一緒に学ぶことで、何が大事なのかわかった。
- ・ 誰のために、何のために工事をするのかを共有する場が出来た。
- ・ 地域とのコミュニケーション 工事の目的を地域に説明。
地域の方から「ありがとう」。
- ・ なぜ良い夫婦なのか自慢しようと、新潟支部を作って、事例を発表会。
- ・ 受注者、発注者、住民が
- ・ 発注者と受注者は仮面夫婦ではなく、良い夫婦になるように、互いに一歩踏み出す勇気を持って、出会ったときのような初々しい良い関係に。
- ・ みんなに「ありがとう」と言われる公共事業を目指して。

15:05～15:15 休憩

15:17～15:42 事例発表「全てを可視化した三方良し ～建設ICTのものづくりのあるべき姿」

○発表者：一二三北路株式会社 建設土木工事部課長 坂下淳一

○はじめに

- ・ 1976年生まれ39歳 酒を飲コミュニケーション
- ・ 現場スタッフ3名 38歳、64歳、28歳
- ・ 2012年に三方良しに出会った。

○工事概要

- ・ 札幌市発注 水管橋の上部工事 工期：H27年2月～H28年3月
- ・ 札幌市内の会社が敬遠するような工事 足場が狭く、現道からのアクセスが難しく、高低差が18m
- ・ 仮設工法を検討：ベント架設とクレーン架設をミックスし、さらに吊りタワーを設置する独自の工法を提案。
- ・ ICTを導入することで不可視部分を可視化することを検討。

- ・ スケッチアップ：現場を可視化し施工関係者全員でイメージを共有。
- ・ イメージがつかみにくい、リアル感がない → VRで現場のスケール感をつかむ

○ 架設職職員さんがVRを体験

- ・ 経験豊富者 リアル、かっこえ～
- ・ 経験4年 架設の経験なし 作業のイメージを膨らませられる
- ・ **笑顔がある 意見が言い合える さらに良いものづくりが出来る**

○ 緑十字の旗

- ・ 無事故、無災害で終わらせたい みんなの寄せ書き

○ VRを活用した水管橋の色彩検討

- ・ 観光地でもあり、周辺住民の方々は色に関心があった。事業に難色を示していた住民の方々と仲良くなるきっかけに
- ・ 13回の現場見学会
 - ・ 中学生にVRを使い、工事の内容、規模のスケールを体験
 - ・ 市の職員への工事説明に
 - ・ 一般住民：工事の規模や意義を理解できた。作業員さんと直接話せる機会が得られて良かった。蛇口をひねれば水が出ることの裏側には、こんな仕事があったことを知ることが出来た。
- ・ 情報誌への反響効果：連合町内会の会報も含め、多くのマスコミで取り上げられ本州の大手企業から、現場の視察をし、自社の工事に取り込みたいと。

○ 導入効果

- ① 工事全体：現場関係者がイメージを共有でき、安全に物づくりが出来た。
- ② 作業従事者：様々な熟練年数の違う者が、危険箇所や出来上りを共有でき現場に活気あふれる。
- ③ 一般者：全行程を体感することで、モノづくりの重要性とその意義の理解につながった。

↓

閉鎖的だった建設現場が、

i-Construction

スマートコンストラクション

愛と情熱をもったものづくり 愛-Construction

- ・ 89点の壁を越え、95点の高得点。
- ・ 発注者も一歩前に出てくれた。越えられない壁はない。
- ・ 三方良しに会い、官民一体となった取り組みに感銘を受けた。

- ・ 安全を可視化し高効率に施工する 企業良し
- ・ 安心して高い品質を見届けること 行政良し
- ・ 住民良し

15:42～15:58 事例発表「当社で取り組む三方良し」

○発表者：福島県福島市 寿建設株式会社 代表取締役社長 森崎英五朗

○当社は

- ・大分出身の祖父がトンネル屋、黒四ダム高熱隧道を施工した責任者
- ・トンネル専門工事、コンサル、トンネルの補修工事、道路補修

↓

職種が多岐にわたる 昨年度は、35件の工事契約に社員50名

○三方良しの公共事業改革

- ・高知に絵本の店ココ・サン
- ・小野組さんに教えてもらい ODS Cシートの作成
- ・初めてのODS C会議
- ・工事看板への工夫：工事規制区間の始まりに工事への協力依頼看板はどこでもあるが、規制区間の終わりに「ありがとう」の看板
言葉の工夫 耐震補強 → 地震に強くします 欄干 → 手すり

○こまめチャンネル 良い取り組みの情報共有

- ・長寿命化 → 橋を長持ちさせる
- ・工事の進み具合を知ってもらえるよう：会社の封筒にトンネル工事の進捗状況を映像で紹介

「まず、人を喜ばせてみよう」 ← 建設業

NMB 泣かす、笑かす、びっくりさせる

喜ばせる技術 選ばれる企業

- ・7年前から「魅せる」現場作り

トラックはぴかぴか、現場詰め所の清掃も徹底的、喚起時間は15分（落語の寿限無を読む）、現場に風鈴、男子トイレの表示に「男なら入ってこい」

○喜ばせる

現場の幹部パトロール → 現場の喜びを喜んであげる →

15:58～16:30 事例発表「高知の片田舎で実践するチーム礪部の三方良しの公共事業、その10年」

○高知県安芸郡奈半利町 有限会社礪部組常務取締役 礪部英俊、工事主任 田中彰司

○はじめに 飛び入りで宮内さんのプレゼン

- ・これまで9回のカンファレンスの中で4回発表、今までは宮内（私）が発表。
- ・2012年の日経コンストラクションの「チーム力」の特集での記事
- ・高知県建設優良工事「9年連続12件受賞」→ なぜ受賞出来たかがわかっていないと、次につながらない。
- ・県の方に聞いた どこがうちの会社の良いところでしょうか？ 「エースを集めたチームが強いですか。チーム力、コミュニケーション、協働することが強み」
- ・「私たちのお客さんは住民です」という考え方が全社員に流れています。

<田中彰司のこの10年>

- ・平成19年、初めての三方良し 地域にとってはなくてはならない道路の山留めを作る工事 見通しが悪く、迂回路もない現場。通行止めが住民の方に迷惑をかける。

○私たちがお客さまは住民

- ・地域を向いた仕事 → 工事だよりの配布
なんか言われたらどうしよう？ 不安
↓
- ・住民の方の反応は「わざわざ説明、ありがとう」「ごくろうさま」
- ・自分が住民の立場なら
どんな工事だろう 道路は通行止めになるのかなあ **住民も不安**

○わからない、見えないもの

- ・人によって経験が違う
- ・でも、誰でも見ればわかる。

○発注者とのコミュニケーションにはCCPM工程表

- ・あと何日かがわかる
- ・どの現場に行っても、コミュニケーションをとる、わからないものを見えるようにする。
- ・コミュニケーションを武器にがんばってきました。

<磯部英俊のこの10年>

○社内のコミュニケーション

- ・工事の目的、予想されるリスクなどを情報共有
- ・台風により現場が土石流で埋没 バックホウも埋没
- ・それでも工期延期をせずに完成できないか、みんなで工程を組み直す
- ・一体感がより強まった

○CCPM工程表により

- ・各自にやる気、工事を共有できる。

○発注者とのコミュニケーション

- ・発注図面だけでは打ち合わせが難しい部分も、3Dにより意志疎通が図れた。変更の協議もスムーズに。

○地域住民とのコミュニケーション

- ・お便り 便りを届けると「いつもありがとう」

◇自転車道の災害復旧工事

- ・お便り配布の反応
家からなかなか出てきてくれない 不安
進行中・過去の工事に対する不満
- ・現場を見に行けないところのことがわかる、不安について答えてもらえる

○この10年から

- ・仕事を始めて10年
- ・自分からアクションを起こしたことで、相手からポジティブな反応が返ってきた。

○これがうちのありのままです 宮内さん

変わらずに生き残るには、常に変わり続けなければならない。
しかし、主体的なありようで変わり続けることは、時としては少々つらい。
ぐるぐる循環するのもありじゃないか。
いずれにしても、ブレない軸は保ち続ける。「私たちのお客さんは住民です」

信頼は現場から生まれ、現場でストックされる。
そしてその信頼は、私たちの最大の武器となる。

16:30～16:50 事例発表「地域住民の安全をいち早く確保するために、

難条件の現場でいかに工夫したか」

○発表者：宮崎県 株式会社内山建設 土木部次長 金丸正明

○紹介する工事は

- ・昨年4月から12月で行った治山工事
- ・地域住民のいち早い安全確保のために、どう取り組んだかを紹介。
- ・道路も無い山麓に治山ダムを造成する工事。標高900～950m
- ・別件発注の現場への仮設道路が、大雨により完成が3ヶ月遅れる。本工事の現場入りは2ヶ月遅れ、治山ダムのコンクリート打設が台風期に重なってしまう。
- ・まず、現場従事者の満足度を高めることから、発注者、地域住民の満足につながると考えた。

○現場従事者への配慮

- ・光波レーダーにより地山の動態観測をし、現場の安全を確認
- ・大型車両（特に生コン車）の往来に耐えられるよう、道路やヤードの軟弱地盤を置換、鉄板敷
- ・大雨時の鉄砲水対策として、作業員の避難所を確保。
- ・途中、完成時に労をねぎらい温泉で慰労会。

○道路利用者への配慮

- ・仮設トイレの提供、意見・要望を呼びかける看板 トイレは一日3回の清掃を徹底
- ・誘導員を配置、生コン車には無線を配備、打説の日は前日に区長さんに連絡、回覧板も
- ・離合場所の配備と番号付け、生コンのオペレーター間で位置情報を共有

○取り組み紹介DVD（約7分間）

- ・応札をためらうほどの周辺環境の厳しい治山工事
- ・災害に何度も遭っている住民から、一日も早い完成を望む声
- ・霧の中でも見えるようにケーブルクレーンのフックなどには反射板
- ・周辺の河川を汚濁していないか、月1回の水質試験
- ・現場内ではゴミ分別
- ・治山工事では最高の88点の評価
- ・インターンシップの感想「土木と建築の大変さ、おもしろさに気づくことができました」

- ・宮崎県治山林道工事コンクールで最優秀賞を受賞

16:50～17:00 休憩

17:00～17:34 第三部 トークセッション「三方良しの公共事業改革」

ゴールドドラットコンサルティング日本代表 岸良祐司（きしら ゆうじ）
国土交通省四国地方整備局長 石橋良啓
西日本高速道路取締役常務執行役員 奥平聖（おくだいら きよし）
三方良しの公共事業推進研究会理事 熊谷一男（くまがい かずお）

石橋：10年前のフォーラムのプレゼン アンケートから始まった。「決定までに時間がかかり、工事の遅延」「工期不足が工事品質の低下に」。

- ・その日のうちに回答、回答できないなら回答できる日を回答。
- ・15件の工事で施工、回答日を返すことも含めると88%達成。
- ・手待ちが減り、コストも押さえられる、工事が早く終わり、施設を早く使える。

岸良：北海道から始まり10年で全国へ。大事にしなければならぬ気づきとは。

奥平：今日の発表で感動することがあり、**世のため人のために工事をしている、それが公共事業であるとの気持ちを持ち続けつつ、何かを淡々とやるのが共通するのかな。**

淡々と 工事便り、わかりやすい看板、現場を見えやすくする やっていることは難しいことばかりではなく、やっている人の、住民への愛情がある。「万事徹底」、そのことで人が育つという成果が出ていることが最も大事では。

岸良：現場で実践してきた熊谷さん、難しいことではないがコメント、感想は。

熊谷：当時は三方悪 工事、現場、日本も悪い時代。地域との関わりで成功事例が出ているが、**当時はなるべく地域住民とは関わらず、早く現場を離れたかったのでは。**

七面倒くさいけれど、より関わったことで、より工事が良くてできることに気づいた。

喜ばせる 誰しもうれしい 10数年前は喜ばしてなかったのかも。

岸良：この10年、ワンデーレスポンスがここまで発展していることにどうですか。

石橋：私に関わったカンファレンスは初回だけ。三方良しのためにワンデーレスポンスだけしていればよいから、手段は他にもいっぱいある。VRを使って三方良し。

岸良：i-Construction は、住民のためだった。

石橋：**10年前は、早く終わることで受発注者が喜び、その結果として住民の方も喜ぶのではなかった。今は、住民の為にがまず感じられる。**

奥平：最初は砂子さんだけだったが、今日の会には全国から集まっている。全てが成功しているわけではない。失敗しても、それを改良の糧にすればいい。人が育ち、会社も育っているのではと感じる。

岸良：住民の為にというのが強く感じられ、デジタル技術は冷たいものかと思ったが、デジタル技

術を駆使してアナログに住民に愛を伝える。

奥平：儲かるようにしてくれがスタートだった。今日発表された会社は、喜んでもらうことで、儲けはあとからついてくる。

熊谷：税金でやる仕事で儲けるとは何事だ！ 順番が違っていただけかも。現場見学会、見せるということとはとても良いことかも。

岸良：看板の外を含めた地域住民を含めて現場だ。技術の駆使も住民のため。現場見学で、建設業の人はカッコいいと言われたが、今日のを見てもっとカッコいいと思った。住民のための仕事をし、高い評価を受け、その姿がカッコいい。

熊谷：今日の事例発表は難工事が多かった。現場の人のパワーを感じた、カッコいい。

岸良：こんな現場ばかりになり、みんなプライドを持って、カッコよくなって、世界から評価される。災害大国は日本だけでなく、日本に学びたいと思っている国は多くある。

これからの三方良しはどう進めていくべきか。

石橋：三方良しをどう進めていくか 三方良しは住民良し、企業良し、行政良し。企業や行政で働いている一人一人が良しとなるような取り組みにならないといけない。それが担い手確保につながる。週休二日が確実にとれるようにしていくとか。働いている一人一人が「良し」となるような取り組みにしていかなければならない。

岸良：現場の一人一人が良しでないと、三方良しは成り立たない。

奥平：まず現場の人の満足度を第一に そういう視点に気づいていなかった。一人一人が満足し、まわりから良さげな職場だと、お母さんからも「良い職場だ」と評価されないと、人が入ってこない。品確法で企業の利益が出るように積算しろとなって、そこそこ利益はでるようになっているので、儲けを社員、下請けさんに分けていただき。i-Construction だけに頼ってはいけない。

熊谷：企業として一番の財産は人材。人材育成は、企業が存続していくための手段。成長した企業や地域を考え、企業はどうしていきたいのかのビジョンがないと。

岸良：今日の事例発表の現場には、「ご迷惑をおかけしております」の看板がない。こういうことをやっていると、喜ばせる、攻めている看板ばかり。それが人を育てていく。

砂子組さんの工事 忙しさの中にも子供と向き合う時間の大切さを教えていただきました。こんな活動をしていたんだと、100年後に土木史に記録されるような三方良しに。

ごめんなさいではなく、ありがとうを集める現場で

17:34~17:39 閉会挨拶 三方良しの公共事業推進研修会奈良支部 支部長 中村光良

- ・ 四国のみなさんがた、いかがでしたでしょうか。
- ・ 10回目、足かけ12年。四国のみなさまにとっては、「初めて聞いたわ」という感じでは。
- ・ 最初ちょっと違うかったね。変わってきたね。奇しくも言うていただきました。
- ・ 全ての事例発表で筋が通っていたのは、紛れもなく住民の為にやっているということ。そこんところを今一度考え、現場に入るたびに、「なぜこれをするのか、誰のためにするのか」を考えることで、全然違うことが生まれると思う。

- ・VR 決して大それたことをやっているのではない。誰のため、ちょっとした勇気を持って、行動を起こした結果。感謝の言葉、良い意味での利益につながる。
- ・総会で、次の10年どうするよ。結論は出ていませんが、来年以降も続けていきたい。一緒にやりたいという方がいらっしゃいましたら、HPに書き込みいただき、共に歩んでいただきたい。

－以上－